近世期の鳥取藩御蔵所の空間構成に関する研究

SPATIAL STRUCTURES OF OKURA-SHO OWNED BY
THE TOTTORI DOMAIN IN THE EDO PERIOD

相模 誓雄*

Chikao SAGAMI

The purpose of this study is to examine some of Okura-sho owned by the Tottori Domain used for shipment of rice, and to clarify the regularity of spatial structures and the effects on spatial structures by environmental conditions. Okura-sho in the Tottori Domain were established on the plains, skirts of mountains or narrow land near the coast. It was known that although there was a basic style for Okura-sho owned by the Tottori Domain, two types were formed as a result of adaptation to the site shape and special environmental condition.

Keywords : Storehouse, Premises, Spatial structure

蔵, 屋敷, 空間構成

1. はじめに

藩政時代、因幡国（鳥取県東部）と伯耆国（同西部）は鳥取藩領であった。鳥取藩もまた、年貢米徴収や廻米のため、領内の所々に御蔵所を設けた（図1）。鳥取藩の場合、御蔵所は立地や主たる用途の違いによって区別でき、それぞれに次の呼称があった。藩庁のある鳥取城及び城下の「三御蔵」^{注1)}、米子城や倉吉陣屋といった領内支配の拠点になった都市における「米子御蔵」や「倉吉御蔵」^{注2)}、海岸部の要衝において廻米^{注3)}に用いられた「灘御蔵」、内陸部の「地蔵」^{注4)}。一方、村々には、年貢米の一時的な保管場所としての蔵があり、これも「地蔵」^{注5)}と呼ばれた。これらのうち「灘御蔵」の橋津御蔵所（以後、読みやすくするため御蔵所を省略し、名称のみに括弧を付けて記す）の建物が現存することはよく知られるところである。但し、それは一部の御蔵であり^{注6)}、その敷地の大半は住宅地などに変わっている。他の御蔵所の建築遺構はない。ところが、『鳥取藩政資料』に、多くの御蔵所の見取図^{注7)}が所収されており（以後、「藩政資料見取図」と記す。後掲図2）、城絵図にも御蔵所及びその建物が描かれている。上記の中心都市部の御蔵所や「灘御蔵」の多くは年貢米徴収や廻米に用いられたので、本稿はそれらの空間形成の規則性及び環境条件が空間構成に与えた影響を明らかにしたい。

廻米に用いられた「灘御蔵」は、前述の〈橋津〉の他に、〈岩本〉、〈浜〉（現在の浜村、以下省略）、〈青屋〉（現在の青谷、以下省略）、〈由良〉、〈大塚〉、〈赤崎〉、〈御来屋〉、〈淀江〉の都合9ヶ所である。また、米子城内の2ヶ所、倉吉陣屋町の2ヶ所も廻米に用いられたので、これらの13ヶ所を取り上げる（図1）。

鳥取藩領における御蔵所創設は、慶安期（1648～1651）以前になる^{注8)}。明暦2年（1656）、知行地における年貢徴収方式が藩庁によ

図1 鳥取藩領の中心都市と「灘御蔵」

って統一された^{注9)}。元禄11年（1698）、請免法が施行され、藩の年貢米徴収を大庄屋が請け負うこととなった^{注10)}。このような藩政前期に多くの御蔵所が設置されたのである。藩政中期にも〈由良〉や〈淀江〉が設置されていった。これらの御蔵所は、藩の勘定所によって支配された。御蔵奉行が常駐し、年貢米徴収の業務を掌握した^{注11)}。また、御蔵目付が出張して年貢米徴収の検査や御蔵所の業務を監視した^{注12)}。なお、藩庁は、年毎に在方から御蔵目付を任命し、御蔵所の適正な運営を心がけたようだ。

2. 既往研究、手順

このような藩政期の地方における諸藩の御蔵所を取り上げた日本建築史研究は、建築遺構が少ないこともあって殆ど見られなかった。このような状況であるものの筆者は、御蔵所に関する貴重な見取図などの史料調査を行い、その空間構成について検討してきた¹⁾。但

* 仙台高等専門学校建築デザイン学科 准教授・博士(工学)

Assoc. Prof., Dept. of Architecture, Division of Production System and Design Engineering, Sendai National College of Technology, Dr.Eng.

し、鳥取藩の〈橋津〉に関しては、浅川滋男らによる貴重な研究報告がある²⁾。浅川らは、主に現存する御蔵を詳細に調査し、それらの変遷を明らかにするとともに、建築的特徴についても詳述している。しかし、領内における御蔵所の空間構成の共通性などについては検討していない。以上のことから本研究は、まず、各御蔵所の初出及と完成期と考えられる藩政後期の建物配置を明らかにし、御蔵の配置の共通点から空間形成の規則性を検討する。次に、検査所の計屋の位置に注目し、敷地形状を含めた周辺の環境条件が御蔵所の空間構成に及ぼした影響についての考察を試みることにする。

3. 御蔵所の建物配置

各「灘御蔵」の敷地内の主な空間構成要素は、御蔵、計屋、奉行小屋、目付小屋である。米子城内2ヶ所の御蔵所や倉吉陣屋町の新御蔵所にも計屋があるが、奉行小屋はなく、目付小屋も必ずしも設けられなかった。御蔵の内部には間仕切りがあり、複数の部屋に分かれていた。1部屋に1つの戸前が開かれ、部屋（戸前）毎に番号で呼ばれていた。

3.1 御蔵所の初出と完成期の建物配置

3.1.1 「灘御蔵」

因幡国の「灘御蔵」は、〈岩本〉、〈浜〉、〈青屋〉の3ヶ所である。〈岩本〉は、万治元年（1658）に創建された^{注13)}。寛文期（1661～1672）の古絵図^{注14)}には、御蔵2棟、計屋1棟、用途不明の建物1棟が描かれるのみである。御蔵所の北側は西流する大川（現在の蒲生川）に接し、東端と西端に「水ぬき川」が通っていた。敷地内においては、表門辺りに計屋があり、これをL字形を成す2棟の御蔵が囲んでいた。享保10年（1725）には、村が建てた蔵もあったことが知られる^{注15)}。作製年は不明だが、藩政資料見取図（後掲図2）には、6棟の御蔵、1棟の計屋、奉行小屋、目付小屋が見られ、規模が拡大している。御蔵は、1番から9番までと「寛政蔵」があり、これらは上記の建物とともに敷地境界に寄せて一筆書き状に連なって配置されている（後掲図3①）。寛政期（1789～1800）の御蔵が見られることから、本図は藩政後期の御蔵所の姿を現していると考えられる。廻米は大川に面する津出し門から船で積み出されていた。一方、嘉永5年（1852）の御蔵には、11番の御蔵が知られ、2部屋増えている^{注16)}。その実態は明らかでないが、増築があったとしても数的に上記の配置に影響を与えるものとは考え難い。

〈浜〉の史料における初出は元禄3年（1690）であることを前述した^{注17)}。作製年不明の藩政資料見取図（後掲図2）には、5棟の御蔵（13戸前）が見られる。御蔵は、敷地境界に寄せて1番から13番まで一筆書き状に配置されている（後掲図3②）。天保13年（1842）の「気多郡浜村田畑地続全図」の御蔵所部分に家形などが描かれており（後掲図4）、上記の見取図と同じ数、配置であるので、藩政資料見取図から藩政後期の建物配置を見ることができる。

〈青屋〉は、万治3年（1660）の創建と『青谷町誌』に記されている^{注18)}。作製年不明の藩政資料見取図（後掲図2）には、3棟の御蔵（1～8番）の他、稲荷社も見られる（後掲図3③）。この御蔵所の場合、藩政後期の建物配置が知られないので参考として検討する^{注19)}。

伯耆国の「灘御蔵」は、〈橋津〉、〈由良〉、〈大塚〉、〈赤崎〉、〈御来屋〉、〈淀江〉の6ヶ所である。

表1 御蔵所一覧表（藩政後期、但し※青屋を除く）

名称	型式	御蔵*4		計屋	奉行	目付	番小屋	その他の施設	特記事項
		棟	戸前						
岩本*1	B		11	○	○	○			三方に水辺
浜	A	5	13	○	○	○			
※青屋	A	3	8	○	○	○	社		
橋津	A	14	38	○	○	○	刺小屋		
由良	A	4	13	○	○	○	社		
大塚*2	A	4～6	10～14	○	○	○	社		
赤崎	B	5	11	○	○	○	*5		海に面する
御来屋*3	A	5	9	○	○	○		木部屋	
淀江	A	5	10	○	○	○	○		
米子東	A	4		○		○	○	「荒尾米蔵」	城内
米子西	A	6		○			*5	道具蔵	城内
倉吉内	—	3				*5	○		陣屋前
倉吉新	A	2	6	○			○	囲御蔵、運賃御蔵	

表注

*1 嘉永5年の戸前数（棟数不明）*2 安政元年～明治7年の棟数、戸前数
*3 7棟の可能性有 *4 特記なき御蔵の棟や戸前の数は、後掲図3及び後掲図9による *5 敷地外に有

〈橋津〉は、史料から寛永12年（1635）に存在したことが知られる^{注20)}。宝暦年間（1751～1763）には12棟の御蔵（34戸前）があった^{注21)}。文化5年（1808）の藩政資料見取図（後掲図2）を見ると、14棟の御蔵（38戸前）があり、増加している（後掲図3④）。さらには、嘉永2年（1849）に敷地を拡張して御蔵の増築を図った^{注22)}。〈橋津〉は、他の「灘御蔵」に比べて御蔵の棟数が多いので、棟毎に名称があった。『新修羽合町史』は、「宝永」は宝永期（1704～1710）、「駒帰」は元禄12年（1699）の因幡国の駒帰御蔵の廃止に関連して設置されたと推測しているが^{注23)}、現在その根拠を示す史料は見られない。藩政後期の御蔵所には、「片山」から「西拾五間」まで一筆書き状に配置された御蔵群があり、棟数が多いので庭にも御蔵が配置されていると見られる。

〈由良〉は、藩政中期の享保4年（1719）に創建されたことを前述した^{注24)}。作製年不明の藩政資料見取図（後掲図2）には、4棟の御蔵（13戸前）の他、稲荷社も見られる（後掲図3⑤）。御蔵は、1番から13番まで一筆書き状に配置されている。安政2年（1855）の「由良御蔵御修覆帳」^{注25)}にも上記と同じ施設が見られるので、上図から幕末期の御蔵所の様子が見て取れる。

〈大塚〉は、寛永12年（1635）に存在したことを前述した^{注26)}。「安政元年（1854）甲寅字中屋敷実況」^{注27)}の御蔵所には、4棟の御蔵（10戸前）の他、番小屋や稲荷社も見られる。御蔵は、1番から10番まで一筆書き状に配置される。一方、作製年不明の藩政資料見取図（後掲図2）や明治7年（1874）の「御蔵所全図」^{注28)}は、6棟の御蔵（14戸前）であり、2棟（4戸前）多い（後掲図3⑥）。しかし、前述の御蔵所の配置に変わりはない。

〈赤崎〉も、寛永12年（1635）に存在したことを前述した^{注29)}。作製年不明の藩政資料見取図（後掲図2）には、5棟の御蔵（11戸前）が見られる（後掲図3⑦）。御蔵は、1番から11番まで一筆書き状に配置されている。弘化2年（1845）の「伯州八橋郡赤崎浦湊絵図」（後掲図5）にも上記と同じ配置の御蔵が描かれているので、上記の見取図から藩政後期の建物配置が見て取れる。

図2 藩政資料見取図

図3 「瀬御蔵」の建物配置比較検討図

〈御来屋〉は、承応2年（1653）に存在したことを前述した^{注30）}。文化5年（1808）の藩政資料見取図（図2）には、5棟の御蔵（9戸前）が見られる（図3⑧）。御蔵は、1番から9番まで、2ヶ所に分かれて配置されている。一方、嘉永7年（1854）の御来屋全景を描いた絵馬（図6）では、御蔵と見られる土蔵2棟の増築が確認でき、御蔵が一筆書き状に繋がった様子が見て取れる。しかし、安政2年（1855）の大家章造家文書「御来屋御蔵御修覆大概」^{注31）}には、1番から9番までの御蔵（戸前）が記されており、御蔵の増減の可能性を指摘できるが、型式には変わらなかったと見られる。

〈淀江〉は、最も遅い藩政中期の明和元年（1764）に創建されたことを前述した^{注32）}。一方、「柄川三世興益事業記」^{注33）}は宝暦4年（1754）の創建としている。本書に、「（前略）五兵衛私財を拗ちて淀江村大字前田に於て地所千五百坪を献じ御蔵五棟を建て国道より御蔵に至る間に直道（御蔵小路）を開く（後略）」とある。文化5年（1808）の藩政資料見取図（図2）には、5棟の御蔵（10戸前）が見られる（図3⑨）。御蔵は、1番から10番まで一筆書き状に配置されている。

3.1.2 「米子御蔵」

藩政中期以後、米子城内において御蔵が敷地を分けて設けられていた（図7及び図8）。御蔵所は、表御門から本丸へ至る広小路を挟んで東西にある。東の御蔵所（以後、〈米子東〉）は、藩の米蔵と藩重臣（城主）荒尾氏の米蔵が併存するという他の御蔵所には見られないものである（後掲図9⑩）。「米子御蔵」は、慶安期（1648～1651）以前に存在したことを前述した^{注34）}。宝永6年（1709）の「伯耆国米子平図」^{注35）}や享保5年（1720）の「湊山金城米子新府」^{注36）}を見ると、城内の内堀沿いに「蔵屋敷」と記される敷地が1ヶ所見られる。一方、元文4年（1739）の「米子御城明細図」（図7）を見ると、藩政後期の各御蔵所の敷地が変わっており、この間に御蔵所の大改造が行われたことがわかる。各御蔵所は、枳形や山を後面にした敷地であり、前面は広小路に面する。敷地境界に番小屋や御蔵を配置し、建物と建物の間を塀で塞いでいる。本図の西の御蔵所（以後、〈米子西〉）は、広小路に向かって唯一の門が開かれ、広い庭が確保されている。4棟の米蔵や道具蔵が庭を囲み、中庭に「御米升屋」と記される計屋が見られる。計屋は、土台、柱、梁、貫、屋根が描かれ、土蔵とは異なる。〈米子東〉は、広小路と「表御門」付近の2ヶ所に門が開かれている（後掲図9⑩a, b）。広小路沿いの2棟の荒尾氏の米蔵、2棟の藩の御蔵、「御蔵横目宅」が庭を囲み、庭にも3棟の御蔵が見られる。

一方、明和2年（1765）の「米子御城絵図」（図8）の〈米子西〉は、敷地が南西側に拡張しており、ここに1棟の御蔵が増築されている（後掲図9⑩a）。番小屋は敷地外にあり、空地を挟んで門と並んでいる^{注37）}。計屋は道具蔵に寄せて配置されている。〈米子東〉も様子が異なっている。門が1ヶ所増えており（後掲図9⑩c）、これに面して計屋が見られる。計屋は、藩の4棟の御蔵の中心にあり、各御蔵は計屋に近づいている。このことから、aの門は荒尾氏の米蔵、cの門は藩の御蔵に関係した可能性が高い。bの門は付近に番小屋と御蔵目付の小屋が見られるので、役人が用いたものであろう。

元治2年（1865）改の「米子御城内惣絵図」^{注38）}の各御蔵所の建物及び配置も上図と同じであり、幕末まで変化はなかった。

図4（左図） 天保13年（1842）の「気多郡浜村田畑地続全図」（部分）

図5（右図） 弘化2年（1845）の「伯州八橋郡赤崎浦湊絵図」（部分）

図6 嘉永7年（1854）の御来屋全景を描いた絵馬（部分）

図7 元文4年（1739）の「米子御城明細図」（部分）

図8 明和2年（1765）の「米子御城絵図」（部分）

ら運び出された。このように計屋は物資運搬の中継所であった。A型の計屋には入口が2辺もしくは3辺それぞれに開かれており、周囲の御蔵に対しては、効率的な建物配置と言える。米を保管するにあたり注意を要するのは、防火や防犯・防衛である。防火に関しては、建物が建て込むので火除け地を確保する必要がある。A型の御蔵所の多くは、御蔵と計屋との間に空間が確保されている。

一方、B型の〈赤崎〉の場合、敷地が極端に細長いので、庭に計屋を配置できない。また、海に面していたので、計屋は御蔵とともに潮風を防ぎ、外国船など海側からの敵の侵入に対しては防衛線としての役割を担っていたと考えられる。なお、物資運搬に関しては、計屋は門の近くに位置していた。〈岩本〉の場合、庭に計屋を配置することは可能である。日比屋川がない頃の計屋は、表門付近にあり、これをL字形に配置された2棟の御蔵が取り囲んでいたことを前述した。日比屋川開削以後の計屋は、日比屋川沿いに移設され、これをL字形に配置された1番から6番までの御蔵が取り囲む形となった^{注52)}。つまり、当初はA型に近い空間構成であった。その後、7番から9番までの御蔵や「寛政蔵」が増築されてB型になったと推測される。〈岩本〉は、周囲の大半を川で囲まれる唯一の事例であった。また、海岸近くに位置するため、潮風によって運ばれる砂の堆積があった^{注53)}。御蔵所の海側を流れる日比屋川は砂を海へ押し流す役割もあったのであろう。計屋は、御蔵とともに飛砂を防いでいたものと考えられる。なお、敷地内には広い庭が確保されているので、門の近くに計屋を設ける必要性は低い。

以上の検討から、敷地形状や特殊な環境条件によって異なる型式ができたと考えられる。

4.2 橋津御蔵所について

〈橋津〉は、廻米の拠点、領内最大の「灘御蔵」であり、規模的には「米子御蔵」に匹敵するので、これとの比較検討を試みたい。〈橋津〉や〈米子東〉の場合、どちらも御蔵の数が多かったので、庭にも建物が建ち並んだ。〈橋津〉の場合、計屋に隣接して「駒舁」や「古拾五間」が見られ、これらの尾垂（土庇）と計屋の入口が接近している。〈米子東〉も同じであり、さらには1棟の御蔵と計屋とが渡り廊下で結ばれていた。つまり、さらに効率的な空間構成であった。一方、防火上不利になる。しかし、どちらも計屋や御蔵の屋根が瓦葺きであり（図3及び図9）、材料的に防火に配慮されていたと考えられる。両者の異なる点は、敷地囲いと計屋の構造である。〈橋津〉の場合、他の「灘御蔵」と同様であるが、「米子御蔵」の場合、御蔵そのものが敷地囲いを形成し、計屋の壁は柱や貫のみで、戸はなかった（図11）。これには、防衛に配慮された城内という環境条件が幸いしたことであろう。なお、陣屋町の外れに位置した〈倉吉新〉のそれも他の「灘御蔵」と同様、厳重な米の保管に対応するものであった。

以上、〈橋津〉は、規模や効率性において領内支配の拠点にある「米子御蔵」に匹敵したが、その建築や敷地囲いは村々の「灘御蔵」と同じ作り方によるものであった。なお、現存する古御蔵は、天保14年（1843）の棟札があり、図3の「古拾五間」を移築したものと考えられている^{注54)}。どちらにも尾垂や3つの部屋が見られるが、前者は桁行12間、後者は15間と異なっている。他に2棟の米蔵^{注55)}が残るが、改築されて全体の姿を止めておらず建築年も不明である。古御蔵も改修されているが、尾垂や上屋の構造、内部が3部屋に仕

図11 藩政後期、「米子御蔵」の計屋の構造

切られていたことなどが知られる。尾垂、蔵の構造については、紙面の都合取り上げない。文献2)を参照されたい。

4.3 鳥取藩御蔵所について

鳥取藩御蔵所の形成過程が知られる史料はあまり見られなかった。しかしながら、藩政前期に設置された〈岩本〉や「米子御蔵」は、藩政前期から中期にかけて規模や建物配置が大きく変化することが知られた。一方、対象とした御蔵所の中では最も遅い藩政中期に設置された〈淀江〉については、創建当時から藩政後期まで規模に変化がなかった。藩政後期になっても御蔵の数に増減や敷地の一部に拡張があった事例が見られたが、どの御蔵所も型式に影響するものではなく、藩政後期は、鳥取藩における御蔵所の完成期と見ることができよう。その意味で図3の〈青屋〉は、形成途中と言えるかもしれない。なお、鳥取藩御蔵所の形成過程については、今後、史料の発見を待って詳しく検討したい。

5. まとめ

本研究によって藩政後期の鳥取藩御蔵所の空間構成について以下のことが明らかになった。

型式形成過程の姿とも考えられた〈青屋〉や御蔵の棟数が少ない事例を除くと、御蔵所は御蔵を敷地境界に寄せて、一筆書き状に配置するといった空間形成の規則性を有した。計屋の位置に注目すると、蔵々を敷地の端にまとめ、計屋がこれから離して中心に配置されるA型と、蔵々に計屋を含めて全ての建物が敷地の端に配置されるB型に分けられたが、A型が大半を占めた。A型は物資運搬、防火に有利な空間構成であった。一方、B型の〈赤崎〉の建物配置は、海に面し、細長い敷地形状による制約を受けた。〈岩本〉はそれはなかったが、複数筋の河川に面し、潮風による砂の堆積を防ぐための河川も開削された。このように、どちらも潮風の影響を受けやすい敷地であったので、計屋は蔵々とともに潮風を防ぎ、防衛線をつくったと考えられた。

以上、鳥取藩御蔵所においては、御蔵と計屋との間の物資運搬や防火のため計屋を御蔵群の中ほどに設けることが理想であった。しかし、敷地形状や特殊な環境条件に適応させることで、異なる型式ができた結論付けられる。

終わりに、貴重な建築遺構があり、廻米の拠点となった橋津御蔵所を取り上げて詳しく検討した。この御蔵所は、城内の御蔵所に匹敵する防火性能を有し、効率性の高い空間構成となっていた。しか

し、敷地囲いや計屋の構造は村々に設けられた御蔵所と同じく厳重な米の保管に対応するものであった。今後は、鳥取藩御蔵所の形成過程の解明に向けてさらに検討を進めていきたいと考えている。

謝辞

本研究においては、鳥取県立博物館学芸員の大嶋陽一氏から鳥取藩御蔵所に関する文献を多数紹介いただき、研究の進捗に大変役立った。また、2015年11月8日に鳥取県東伯郡湯梨浜町橋津で開催された『全国藩倉シンポジウム』において、実行委員長佐々木靖彦氏をはじめパネラーの方々から、御蔵の遺構の貴重性、まちづくりにおける影響の大きさについてご教示をいただいた。深く感謝を申し上げる。

参考文献

- 相模誓雄：近世期の加賀国における加賀藩御蔵所の空間構成に関する研究，日本建築学会計画系論文集，第79巻，第705号，pp. 2517～2526，2014. 11
相模誓雄：近世期の能登国における加賀藩御蔵所の型式の決定要因，日本建築学会計画系論文集，第78巻，第688号，pp. 1389～1397，2013. 6
相模誓雄：近世期の能登国における加賀藩御蔵所の空間構成に関する研究，日本建築学会計画系論文集，第77巻，第682号，pp. 2865～2872，2012. 12
相模誓雄：近世期の越中国における加賀藩御蔵所の空間構成に関する研究，日本建築学会計画系論文集，第77巻，第676号，pp. 1471～1478，2012. 6
相模誓雄：近世期の北上川沿いに設けられた盛岡藩御蔵所の空間構成の特質，日本建築学会計画系論文集，第75巻，第657号，pp. 2693～2699，2010. 11
- 浅川滋男編：橋津の藩倉～今にのこる鳥取池田藩の灘御蔵～，鳥取県文化財保存協会，1996
- 鳥取県編：鳥取藩史4，鳥取県立図書館，1971
- 鳥取県編：鳥取藩史2，鳥取県立図書館，1970
- 鳥取県編：鳥取県史3，鳥取県，1979
- 鳥取県編：鳥取藩史5，鳥取県立図書館，1971
- 鳥取県編：鳥取県史9，鳥取県，1975
- 岩美町誌刊行委員会編：岩美町誌，岩美町役場，1968
- 青谷町誌編さん委員会編：青谷町誌，青谷町，1984
- 鳥取県編：鳥取県史13，鳥取県，1978
- 羽合町史編さん委員会編：羽合町史前編，鳥取県東伯郡羽合町教育委員会，1967
- 羽合町史編さん委員会編：新修羽合町史，羽合町，1994
- 松井儀平：逢東村史之実録，1931（藤本一美編：鳥取県琴浦町逢東とその周辺の郷土誌 地歴・民俗稿，2010所収）
- 淀江町編：淀江町誌，淀江町，1985
- 倉吉市史編纂委員会編：倉吉市史，倉吉市，1973
- 鳥取県編：鳥取県史12，鳥取県，1979
- 大栄町誌編さん委員会編：大栄町誌，大栄町役場，1980
- 鳥取県編：鳥取県史11，鳥取県，1981
- 新修気高町誌編纂委員編：新修気高町誌，鳥取市，2006

注

- 注 1) 鳥取城内に家中の扶持米を収納する「内蔵」、城下に「御支配切手米」を収納する「柳蔵」や「新蔵」があり、「三御蔵」と呼ばれた。
- 注 2) 伯耆国の米子城は鳥取藩家老米子荒尾氏の居城、同倉吉陣屋は倉吉荒尾氏の陣屋であり、周囲に武家屋敷を抱えていた。蔵米は、廻米として運び出されたが、一部はその家臣の扶持米になった。
- 注 3) 文献 3)，p. 267 藩米の大坂、江戸等へ輸出を「大廻米」、「灘御蔵」より「三御蔵」へ、領内において御蔵所から御蔵所への運送を「小廻米」と呼んだ。前者は、換金して藩財政の収入とし、一部は領外藩邸詰めの家中の扶持米になった。
- 注 4) 文献 3)，p. 16 本書に、「(前略) 智頭郡・奥八東郡・日野郡の大部分は地払所と称し銀納なるを以て、以上の御蔵には納入せず。別に其地方に地蔵と称して一時収納する蔵々あり。其内藩庁にて建設したるあり。又は郡村にて設けたるあり。智頭の香音寺・山崎は前者に属し、日野の多くは後者に属す。」とある。八東郡の若桜宿にも藩の御蔵があった。しかし、それ

- ら藩の御蔵の建物の実態が知られる史料は見られない。
- 注 5) 前掲注 4) この「地蔵」は所謂郷蔵であろう。
- 注 6) 現存する「古御蔵」に、天保14年(1843)の棟札がある。他にも2棟の蔵が残るが、移築等を経ており創設年は不明である。
- 注 7) 鳥取県立博物館蔵 「灘御蔵」9ヶ所、「三御蔵」2ヶ所、「倉吉御蔵」2ヶ所の見取図がある。〈橋津〉〈御来屋〉〈淀江〉に関する見取図は文化5年(1808)、〈青屋〉に関する見取図は文化6年(1809)に作製されている。文化3年(1806)、幕府は諸藩に海防を指示した。城外にある御蔵所は最も警戒を要する施設であり、この備えのため藩が各御蔵所に詳細な見取図を作成させたものと推察される。〈浜〉〈由良〉〈赤崎〉〈倉吉内〉〈倉吉新〉に関する見取図も表現方法や内容(情報)が上記の見取図に似ており、同様に御蔵所の現状を把握するために描かれたのではないか。〈岩本〉に関する見取図が簡略化されて、〈御来屋〉のそのみが絵画的手法を用いて描かれた理由は明らかでない。
- 注 8) 文献 4)，p. 213 本書に、「(前略) 橋津・大塚・赤崎・米子・倉吉は慶安以前、已に之れ有り。御来屋は承応二年、岩本・青屋は寛文六年。浜村は元禄三年各御支配帳に見ゆ。(中略) 由良には享保四年に新設せられ、淀江には明和の初年出来せしか如し。」とある。
- 注 9) 「在方御法度」(文献 5)，pp. 174～176)
- 注 10) 文献 6)，p. 401 本書に、「元禄十一年、領内一円に請免となりてよりは、代官口屋番所立見等、すべて廃止せられ、年貢米其他の取立は、すべて大庄屋以下にて、(後略)」とある。
- 注 11) 文献 3)，p. 16 本書に、「御蔵奉行は勘定所に隸属し御蔵一切の事を督し、御蔵目付は在方手にして専ら収納を監視す。」とある。
- 注 12) 「在方諸事控」(文献 7)，p. 981 所収)，安永8年(1779) 本書2月2日の条に、「一御蔵目付之儀は、役筋之儀付心を付御蔵奉行善悪可申達事。」とある。
- 注 13) 文献 8)，p. 216 本書における横山家文書の引用による。なお、横山家文書の所在は不明。
- 注 14) 横山家文書「寛文年中岩本村傍示境、漁場之争論仕候砌、差出候古絵図面写し」の写し図(文献 8)，p. 219 掲載)
- 注 15) 「在方諸事控」(文献 7)，p. 185 所収)，享保10年(1725) 本書10月22日の条に、「一岩本御蔵おたれ困候節、又は村方より建置候蔵へ御米入候日より、岩本村より夜番勤来り候。(後略)」とある。
- 注 16) 大塚章造家文書「岩本御蔵御米出入記」，鳥取県立博物館蔵，嘉永5年(1852)
- 注 17) 前掲注 8)
- 注 18) 文献 9)，p. 250
- 注 19) 「在方諸事控」(文献 10)，pp. 1207～1209 所収)，明治2年(1869) 本書6月12日の条に、〈青屋〉の5番と8番の御蔵が記されており、本書に9番以降の御蔵は見当たらない。藩政資料見取図の御蔵の部屋(戸前)数は1番から8番までである。
- 注 20) 鳥取藩政資料「万留帳」，鳥取県立博物館蔵，寛永14年(1637) 本書に、「一、寛永拾貳年分赤崎大塚御蔵禰すミくい六俵三斗五升九合橋津御蔵禰すミくい(後略)」とある。
- 注 21) 「湊村明細帳」(文献 11)，pp. 397～399 所収)，宝暦期(1751～1763)
- 注 22) 鳥取藩政資料「屋鋪渡し帳五」，鳥取県立博物館蔵，文政9年(1826)～嘉永4年(1851) 本書に、「嘉永貳年酉 一河村郡橋津御蔵所屋敷手狭ニ付増地之儀御勘定所より去申十二月相伺御調たり候付(後略)」とあり、新田奉行による見分が行われた。添付の図面から増地の位置が知られる。
- 注 23) 文献 12)，pp. 258～259
- 注 24) 前掲注 8)
- 注 25) 鳥取大学附属図書館蔵
- 注 26) 前掲注 20)
- 注 27) 文献 13) 掲載
- 注 28) 文献 13) 掲載
- 注 29) 前掲注 20)
- 注 30) 前掲注 8)
- 注 31) 鳥取県立博物館蔵
- 注 32) 前掲注 8)
- 注 33) 文献 14)，pp. 1445～1451 所収
- 注 34) 前掲注 8)
- 注 35) 鳥取藩政資料，鳥取県立博物館蔵

注 36) 鳥取藩政資料, 鳥取県立博物館蔵

注 37) 番小屋のある敷地にも 2 棟の「御米蔵」が見られるが、かなり小規模なものである。また、後掲注 38) の藩政後期の絵図では、1 棟になっているので、本研究では取り上げない。

注 38) 米子市立山陰歴史館蔵

注 39) 前掲注 8)

注 40) 文献 15), p. 408

注 41) 倉吉博物館蔵

注 42) 「久米郡倉吉宿田畑字限絵図」, 倉吉博物館蔵, 明治 5 年 (1872) 本図のうち、全図 (略図) において陣屋跡から直近の川岸に「御蔵跡」の字名が見られる。

注 43) 「因府年表」宝暦 12 年 (1762) 7 月 15 日の条

注 44) 本書の 12 月 29 日の条 (文献 16), p. 70 所収)

注 45) 図 9 ㊹の<倉吉内>は、1 棟が 2 戸前であり、都合 6 戸前ある。鳥取藩の「灘御蔵」の場合、1 棟の御蔵がいくつかの部屋に分かれており、各部屋は番号で呼ばれていた。1 部屋に 1 ケ所の戸前が開かれるので、<倉吉内>には 6 番の御蔵があったと考えられる。7 番 (4 棟目) 以降の御蔵もあったことは否定できないが、敷地の広さからその可能性は低いと考えられる。

注 46) 「天保二年御普請部屋日記」, 鳥取県立博物館蔵 本書に、「一倉吉御蔵御建替相成候処左之板類御建山ニ而被遣候様相願候処惣而御蔵御普請御入用物御蔵下ニ而差出候儀ニ候得共土手沓ヶ所御建替有之下々難渋之趣 (後略)」とある。<倉吉内>の周囲に土手を設ける余地はないので、<倉吉新>と考えられる。図 1 0 の<倉吉新>の周囲に凡例に「山裾大岸草原」と記される彩色部があり、川除の堤防も同じ色で描かれているので、土手と見られる。

注 47) 「在方諸事控」宝暦 3 年 (1753) 9 月 27 日から 10 月 8 日までの間 (文献 7), p. 632 所収) に、「(前略) 此度従公義御国々ニて御園初被仰付候ニ附、右之石数正米粗ニて御蔵々々相納候様ニ被仰付。(後略)」とあり、藩命で園初が御蔵所に置かれた。

注 48) 「在方諸事控」天保 15 年 (1844) 9 月 14 日の条 (文献 4), p. 130 所収) に、「一倉吉御蔵納之儀は、川出し并橋津下ヶ為運賃米、沓俵ニ付内御蔵沓升五タ・新御蔵沓升沓合宛御納所米之内引当り、沓升沓タ之分沓升式タ三式、沓升五タ之分沓升七タ零五六ツ、積り立、御蔵預り別上納被仰付、(中略) 右は五拾年斗前迄は御蔵払、其日出俵丈ヶ之運賃沓升五タと沓升沓合宛別ニ相納、則に今新御蔵所えは運賃蔵と相唱候御蔵御座候。」とあり、廻米は川下げされて領内最大の「灘御蔵」の橋津御蔵所へ運ばれている。また、「倉吉万日記 (写し)」(寛政 10 年 (1798) 成立, 鳥取県立図書館蔵) に、「明暦二丙歳十一月一日定也 高七百五十俵扶持方八十七人也」とある。

文献 17), p. 1134 他は、鳥取城内の御蔵所、「米子御蔵」、「倉吉御蔵」の主な目的は、家臣の知行米の集荷・貯蔵・配給と述べているが、それと上記の廻米との比率は知られない。

注 49) 「在方諸事控」天保 9 年 (1838) 11 月 11 日の条 (文献 18), p. 1249 所収) に、「一、倉吉御蔵所ニて、久米郡市場村伊左衛門と申者、御年貢米八番之御蔵より、中出し米取調参り不審鉢之者居申ニ付 (後略)」とあり、天保 14 年 (1843) より前に 8 番 (部屋・戸前) 目の御蔵があったことが知られる。<倉吉内>は敷地が狭く、前述したように 4 棟の御蔵があったとは考え難い。一方、<倉吉新>に 1 棟 (2 戸前) の御蔵を追加しても、蔵々が「計屋」を囲む型式には変わらない。

注 50) <青屋>は、御蔵の棟数が少ない上に、敷地の西側を火除け地としていたと見られる (図 3 ㊸)。

注 51) 弘化 4 年 (1847) 2 月 27 日の「在方諸事控」(文献 16), pp. 327~328 所収) に、「御来屋御蔵此度之御廻米千百式拾五俵、去ル七日御廻米下作廻前田源三郎立会御手船寛肇丸賄政右衛門え相渡し、計り屋尾垂等え為差置、(後略)」とあり、計屋は藩の廻米を廻漕業者へ引き渡したのちの仮置き場になっていたことがわかる。

注 52) 7 番の御蔵と 8、9 番の御蔵については、建築年が明らかでないが、各門から離れているので 1 番から 6 番までの 3 棟の御蔵より後の建築と思われる。

注 53) 文献 8), pp. 217~218

注 54) 文献 2), p. 15

注 55) 図 3 ㊹における「片山」のうちの 1 部屋 (3 間×5 間) と、「三拾間」のうちの 1 部屋 (3 間×5 間) と考えられている。

図版出典

図 1 筆者作製

図 2 鳥取藩政資料, 鳥取県立博物館蔵 ①928「岩本御蔵絵図」、②931「浜村御蔵絵図」、③929「青屋御蔵絵図」、④932「橋津御蔵絵図」、文化 5 年 (1808)、⑤935「由良御蔵絵図」、⑥938「大塚御蔵絵図」、⑦936「赤崎御蔵絵図」、⑧939「御来屋御蔵絵図」、文化 5 年 (1808)、⑨940「淀江御蔵絵図」、文化 5 年 (1808)、⑩934「倉吉御蔵図」、⑪933「倉吉新御蔵絵図」

図 3 敷地や建物の長さ、建物配置は、藩政資料見取図 (図 2) をもとにして、縮尺を 1 間を 1 mm として作製した (但し、本紙面上の図版はやや縮小されている)。長さが記されていない建物や尾垂は点線で大まかに描いた。藩政資料見取図に記される屋根の材料や敷地囲いの種類を記号化して記した。周辺の土地利用は、藩政後期の田畑関係絵図や町・村絵図などによる。方位は、特記ない場合藩政資料見取図による。

①藩政資料見取図 (1 枚、作製年不明) の敷地形状は整っておらず、主たる部分の長さも記されていないので、本図に「御蔵敷地千式百四拾八坪」とある広さの方形として描いた。屋根の材料や敷地囲いの種類は不明。藩政時代の周辺の土地利用も知られない。方位は、藩政資料見取図に記されていないので、参考までに下記のように現在の地図において方位角を測定した。御蔵所は大川沿いにあった。その跡地は水没しているが、並行する対岸の集落は土地の形状を留めているので、地図上の対岸の方位角とした。

②藩政資料見取図 (2 枚、作製年不明) に敷地囲いは描かれていないが、北西側に「五拾四間惣垣」、北東側に「垣式拾七間式尺」、南西側に「垣拾式間五尺」、南東側に「山」と記されている。敷地は、建物配置を優先し、北西側と北東側の垣の長さによる方形として描いた。さらに上記の見取図を詳しく見ると、5 番から 7 番までの御蔵の裏側に「後口土手」、7 番から 9 番までの御蔵の裏側に「後口土手 下直ニ往来」、1 1 番の御蔵の裏側に「後口土手 切岸 下直ニ往来」、1 2 番と 1 3 番の御蔵の裏側に「後口土手 切岸」とある。切岸とは、敵の侵入を防ぐため人工的に作った断崖である。また、天保 13 年 (1842) の「気多郡浜村田畑地続全図」(図 4) に描かれる御蔵群も、本図の凡例に「山裾大岸草原」とある土地で囲まれている。御蔵所跡地は山麓の高台にあるので (文献 19), p. 267)、北西辺、北東辺、1 2 番と 1 3 番御蔵の裏側に崖を描いた。周辺の街道や道、土地利用は上記の田畑地続全図による。

③藩政資料見取図 (2 枚、作製年不明) の 1 枚に、「表側三拾沓間余 裏行三拾八間余 惣廻り垣百四拾五間余」とあり、敷地境界線各辺の長さは記されていない。敷地は、上記の表側と裏行を参照し大まかに描き、敷地境界部全てに垣を描いた。一方、もう 1 枚の図において敷地境界線の北辺から東辺及び南辺までにかけて「此通り土手並木有」などと記されているので、流町や御蔵町に接する敷地境界部に土手を記した。周辺の字名、道、土地利用 (屋敷地) は弘化 2 年 (1845) の「気多郡芦崎村田畑地続全図」(鳥取県立博物館蔵) による。

④藩政資料見取図 (1 枚、文化 5 年 (1808)) の他に、「橋津藩藩御蔵之絵図」(作製年不明, 鳥取県立博物館蔵 本図に、「此ノ図中ニ嘉永増設之蔵ナケレバ此之図ハ嘉永以前ノ施設ヲ示シタルコト確ナリトイフベシ」と加筆 (昭和 8 年 (1933) 以後) されている) がある。両者の建物の棟数、配置は同じであるが、いくつかの御蔵の梁行き長さ、尾垂の幅 (梁行き方向) に若干の違いが見られる。また、御蔵の名称にも違いが見られる。「西拾五間」や「山下」は前者、「三拾間」は後者の名称とした。屋根の材料は、後者の絵図による。嘉永期 (1848~1853) 拡張部分は、前掲注 22) の付図による。周辺の土地利用のうち、北や西隣りの屋敷地、道は、「天保 15 年 (1844)、湊村田畑地続全図」の写し (橋津御蔵所跡「片山蔵」内展示) による。

⑤周辺の街道や道、土地利用 (屋敷地) は、天保 11 年 (1840) の「由良宿絵図」(北栄町立北条歴史民俗資料館蔵) による。1 番から 6 番までと、1 0 番から 1 3 番までの御蔵の屋根は、藩政資料見取図では檜葺であるが、安政 2 年 (1855) の「由良御蔵御修復帳」(前掲注 25)) では瓦葺と記されている。

⑥※印で示した御蔵は、作製年不明の藩政資料見取図や明治 7 年 (1874) の見取図 (前掲注 28)) に見られ、安政元年 (1854) の見取図 (前掲注 27)) に見られない。藩政資料見取図では御蔵 3 番と 4、5 番とが別棟とも見られるが、作製年が知られる安政元年 (1854) の見取図に描かれる一棟とした。同図に見られる番小屋、神社を描いた。周辺の街道や道、川、土地利用 (屋敷地、堤塘、土手、新田、石浜、米積場) は安政元年 (1854) の見取図、火除け地は明治 7 年 (1874) の見取図による。

⑦藩政資料見取図 (2 枚、作製年不明) の敷地 4 辺のうち山側の 1 辺は、整

っていないので、直線として描いた。周辺の街道や道、水路、土地利用（屋敷地等）は、図5による。

- ⑧藩政資料見取図（1枚、文化5年（1808）、図2）は、他の見取図と異なり、絵画的手法により建物などが立体的に描かれている。敷地囲いは曲線状の垣である。一方、嘉永7年（1854）の御来屋全景を描いた絵馬（図6）の町屋敷に接する敷地境界線は直線状に整っているため、敷地形状は後者の図を参照した。その長さについては、街道に並行する長さを前者の図に記される「表通り七拾四間」とし、奥行きは長さは知られないので、建物配置を優先して大まかに描いた。敷地周辺の道、川、土地利用（屋敷地等）は、後者の図による。後者の図のみに見られる御蔵2棟の位置を示した。1番から4番までの御蔵の屋根は、文化5年（1808）の藩政資料見取図では葺葺であるが、安政2年（1855）の「御来屋御蔵御修葺大概」（前掲注31）では瓦葺と記されている。なお、上記の史料から建替えによって瓦葺になったことが知られる。

- ⑨藩政資料見取図（1枚）は、文化5年（1808）の作製。周辺の道、土地利用（屋敷地、耕地等）は、天保13年（1842）の「汗入郡淀江村田畑地続全図」（米子市淀江支所蔵）による。

図4 鳥取県立博物館蔵 御蔵の家形には仕切りがあり、部屋（戸前）と見られる。鳥取藩は、正確な年貢徴収を行うため、天保10年（1839）から15年（1844）にかけて土地調査を実施し、田畑地続字限絵図や田畑地続全図が作製された。これらの図には、田、畑、屋敷地の土地利用が見られる。また、家屋が家形として描かれるものがあり、家並みが知られる。原図の写真に、方位を加筆し、（ ）の文字を記入した。

図5 鳥取藩政資料、鳥取県立博物館蔵 原図の写真に、方位を加筆し、（ ）の文字を記入した。

図6 住吉神社（大山町御来屋）蔵 原図の写真に、御蔵所の範囲や方位を加筆し、（ ）の文字を記入した。

図7、8 鳥取藩政資料、鳥取県立博物館蔵 原図の写真に、各御蔵所の範囲や方位を加筆し、（ ）の文字を記入した。

図9 全て1間を1mmとして描いた。方位は、現在の地図上において、各御蔵所跡地が接する街路が真北と成す角度を実測し、この角度を用いて描いた。

⑩明和2年（1765）の「米子御城絵図」（図8）と前掲注38）元治2年（1865）の「米子御城内惣絵図」に描かれる両御蔵所の内容は殆ど変わらない。建物や堀の長さ、周辺の土地利用は、これらの図による（⑪も同じ）。枳形も同じ。元文4年（1739）の「米子御城明細図」（図7）の敷地範囲を点線で、同図に見られない御蔵を示した（※印）。屋根材は、弘化4年（1847）「米子御城門正面之御絵図」（鳥取県立博物館蔵）による（⑪も同じ）。

⑪荒尾氏の米蔵については、元文4年（1739）の「米子御城明細図」（図7）から判明する。また、前掲注38）元治2年（1865）の「米子御城内惣絵図」は、藩の施設と荒尾氏の施設を色分けしていると見られ、上図と同じ。

⑫図2⑫に、門、敷地境界の長さや種別、建物の長さが記されている。御蔵は、戸前が描かれるが、間仕切りは描かれてない。敷地各辺、建物の長さ等は上図による。藩政後期の町絵図が見られないが、明治4年（1871）写しの「倉吉町市中絵図」（倉吉博物館蔵）に、「御陣屋」や「内御蔵」の名称やそれらの敷地が描かれているので、周辺の土地利用は上図を参照した。なお、両図の〈倉吉内〉の敷地の広さは、ほぼ同じである。屋根材は、藩政資料見取図による（⑬も同じ）。

⑬敷地各辺、建物の長さ等は図2⑬による。周辺の土地利用は図10を参照した。

図10 倉吉博物館蔵 左図は全図（略図）。右図は字限図のうち「字新蔵附」。〈倉吉新〉以外の土地は、全て田もしくは畑と記されている。原図の写真に、記号、凡例、（ ）の文字を記入した。

図11 鳥取藩政資料「米子御城門正面之御絵図」、弘化4年（1847）、鳥取県立博物館蔵 原図の写真に、（ ）の文字を記入した。右側に、各計屋部分のみを拡大して掲載した。

本図の〈米子西〉には、図8の見取図において初見される増築された御蔵が見られない。本図は、城絵図の中では天守などの建物や内堀沿いなどの樹木が絵画的手法を用いて描かれており、題名のとおりに正面から見た城郭の景観を描くことを主眼としたものと考えられる。従って、正確性にはやや欠けると見られる。

本研究は、科研費（26420645）の助成を受けたものである。

SPATIAL STRUCTURES OF OKURA-SHO OWNED BY THE TOTTORI DOMAIN IN THE EDO PERIOD

*Chikao SAGAMI**

* Assoc. Prof., Dept. of Architecture, Division of Production System and Design Engineering, Sendai National College of Technology, Dr.Eng.

Chapter 1: The purpose of this study is to examine some of Okura-sho owned by the Tottori Domain used for shipment of rice, and to clarify the regularity of spatial structures and the effects on spatial structures by environmental conditions. Okura-sho subject to this study are nine "Nadaokura", and four Okura-sho located in the central area such as Yonago Castle and Kurayoshi Jinya-machi. Among these Okura-sho, the architectural remains were found only in Hashizu Okura-sho. However, the drawings were presented for each Okura-sho.

Chapter 2: It shows past studies and procedures of the study.

Chapter 3: It clarifies the formation of each Okura-sho and shows the building arrangement in a later stage of domain administration. "Nadaokura" consisted of main buildings such as Okura, Hakariya (inspection station), Bugyo-goya (station for magistrates) and Metsuke-goya (station for inspectors). In Okura-sho located in the central area, there were also Okura and Hakariya, however, not Bugyo-goya or Metsuke-goya necessarily. In almost all of Okura-sho, Okura was arranged in a form like an one-stroke sketch, located closer to the border of the site. When focusing on the location of Hakariya, there were two types of arrangement: some Hakariya were located in the garden surrounded by a group of Kura (type A) while others were located closer to the border of the site (type B). Type A accounted for most.

Chapter 4: The type A was the spatial structures that was advantageous to conveyance of materials and to fire prevention. On the other hand, Akasaki of the type B faced the sea, and building placement had a condition for a slim site shape. Iwamoto of the type B did not have it, but was affected by the excavation of the river which was planned to prevent sedimentation of the sand caused by the sea breeze. The hakariya and storehouses of the type B had the roles that were prevented window. Also these formed a defense line on the sea side of the okura-sho. The above-mentioned thing became clear. Furthermore, I added consideration to the Hashizu of the type A that was a base of shipment of rice.

Chapter 5: In conclusion, I stated that although there was a basic style for Okura-sho owned by the Tottori Domain, two types were formed as a result of adaptation to the site shape and special environmental condition.

(2015 年 11 月 10 日原稿受理, 2016 年 3 月 8 日採用決定)